

英霊にこたえる会たより

戦地からの父の手紙

兵庫県遺族会 吉識 隆子

本会が、平成28年4月23日に開催した第42回総会で、兵庫県遺族会の吉識隆子氏に「母と歩いた戦後70年……祈りと感謝」と題する「語り」を歌・藤原千鶴氏、伴奏・玉置三貴氏の共演で披露していただき、その内容を「英霊にこたえる会たより第59号」に紙面上で、再現したが本資料はその続編とも云うべきものである。(小見出し・事務局)

〇母が私に

これは平成二十八年十月五日に兵庫県姫路市で行われた近畿遺族会第三ブロック会議で発表させていだいたものです。

発表では私の教え子でバイオリン演奏者の小西直子さんが当時の父や母の心情にそった曲を

演奏し全体を盛り上げてくれました。

家庭の事情をあからさまにすることに迷いもありましたが、両親や家族を残して戦場に向かわざるを得なかった当時の父の気持ちを想い発表させていただきました。

〇母が私に残してくれた

父からのたより

英霊にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖国神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

新たな国立の戦没者追悼施設は、心ある多くの国民の声と力を結集して、断固阻止しましょう。

激動の昭和を生き抜いた私の母は平成二十四年に九十六歳で父のもとへ旅立ちました。母は七十数年前に父が戦地から送って来た手紙やはがきを大切に保管し、私に残してくれました。その手紙も七十数年の歳月を経ていますので、紙はさすがに黄土色に変色していますが、カタカナと漢字で書かれた文字は生き生きとし、当時の父の思いがしっかりと伝わってきます。所々シミのようになって字がかすれた箇所がありますが、それは読みながら流した母の涙の跡だと思われます。

母は戦地からの父の手紙を読みながら、父の無事に安堵するとともに、過酷な戦場にあっても家族や子供を案ずる優しい父に涙し、また、この優しい夫を奪ったむごい戦争に対する憎しみや悔しさの涙も流したことでしよう。母のいろんな涙の跡を残した父の手紙からは、当時の母の計り知れない悲しみと、父と母の優しく、暖かい温もりや深い愛情の絆が感じられ、切な

い思いで胸がいっぱいになりました。

異国の丘

♪今日も暮れゆく 異国の丘に

友よつらから 切なから

がまんだ待つてる 嵐が過ぎりや

帰る日もくる 春がくる

明治四十五年生まれの父は、もし、今生きておれば百五歳です。家は農地を多く持った地主でありながら農業を嫌い、姫路の広畑製鉄所に勤めていたそうです。母とは当時としては珍しく恋愛結婚です。女学校を出て東京の専門学校に進み、卒業後は青年学校に勤めた母は農業ができませんでした。したがって吉識家にとっては歓迎されない嫁だったのです。

○父・応召され征途へ

昭和十九年五月十八日、父は大東亜戦争の臨時召集で第五十四師団歩兵第百十一連隊に応召され、ビルマのラングーンに向かいました。二十三歳の時です。

露営の歌

♪勝ってくるぞと 勇ましく

誓って故郷（くに）を 出たからは

手柄たてずに 死なうようか

進軍ラッパ 聞きたびに

険（まぶた）に浮かぶ 旗の波

出征の日、父は沢山の村人や家族・親戚に見送られ、姫路駅から汽車で門司駅に向かったと思われまます。

駅のホームで四歳の兄は子ども心に沢山の人の見送りに、ただならぬ心配を感じ、汽車に乗り込もうとする父の足を掴んで「行ったらあかん、行ったらあかん」と泣き叫び離さなかつたそうです。おそらくこのときの父は魂が引きちぎられる思いで汽車に乗り込んだに違いありません。

この姫路駅での父と母の別れが二人の今生の別れとなり、母の苦勞の始まりでもあったのです。

○車中からの第一報

父は車中、「第一報」と称して母に最初の手紙を送っています。

「心おきなく出発した。今の気持ちは非常にさっぱりしている。将来の輝かしき希望に満足して家のことは心配しない。書くこともない程だ。

然し、年若い親だけは大事にしてくれ。俺は何の孝行もすることなく出発した。だからお前が誠心誠意努めてくれ。元気で強く生きるつもりだ。任地のことは心配いらぬ。生きて帰ると思っているの死後の事は申さない。救命綱も他人の物を分けてもらったので心配するな。携行品については手落ちなし。十分、親、兄弟に可愛がってもらえ。列車は十九日午前六時二十分、門司港に向かって進行中である。家族、子供を連れて時々姫路に遊びに出よ。俺の健康は目下、非常によい。戦地に於いても十分気をつけるつもりだ。お前の親にもよろしく伝えてくれ。子供を余り叱るなよ、では元気でさようなら」

武雄

おそらく父は揺れる汽車の中で、自分は死の不安を抱きながらも、これから先、自分のいなくなつた吉識家で二人の子供を抱え、途方に暮れるであろう若い妻を思い、安心させるため、車中一睡もせず、万感の思いを込めてこの手紙を書いたに違いありません。この父の思いに応えるため、母は子どものため、家族のためにひたすら働き続けたのだと思います。

はるかな友に

♪ 静かな夜ふけに いつもいつも

思い出すのは おまえのこと

おやすみ やすらかに たどれ夢路

おやすみ たのしく こよいもまた

○父が溺愛した兄への手紙

当時、父は四歳になった兄を溺愛してしました。このことは父から兄への手紙を読んでもわかります。一方、一歳の誕生日を迎えたばかりの私には一通の手紙もありません。いくら字が読めないからとはいえ、一通ぐらいは残して欲しかったというのが、私の正直な気持ちです。

父は自分が両親にそうされたように、兄を吉識家の長男として、また、家の跡取りとして立派に育てなければならぬという使命感を持っていたのだと思います。出征時、父はまだ字の読めなかった四歳の兄に次のような手紙を残しています。

「出征にさいして」 徹に

「父は昭和十九年五月十八日、大東亜戦争のため出征する。お前は年四才にして、おじいさん、おばあさん、母、百合子おばさんとともに姫路まで見送ります。お前は少し体が弱いのでよく菓を飲んだ。ワカモト、メタポリン、ゲリド

メ等。しかし、歳に似合わずよく物を知っていた。姫路に連れていけば「この電車はどこにいくか？この汽車はどこゆきか？」と尋ねては、父を困らせたものだ。汽車、電車が好きで、お父さんによく絵を書かせたものだ。木の三輪車を買ってやってそれで二人で遊んだりもした。

お前はお父さんがたつ時「お父さんは戦争にいくから、おかあさんとやんちゃをしないでおれよ」と言うと、「行ったらあかん、行ったらあかん」と言ってお父さんを困らせたものだ。妹の隆子とよくけんかをして隆子のおもちゃを取ってよく泣かせたものだ。お父さんが帰るまで、体に気をつけて立派なひとになれ。お父さんは徹が大きくなってこの字が読めるようになる日を楽しみにしている。元氣でお父さんが帰る日を持っておれ」

父より

この手紙の余白には兄の好きだった電車や汽車の絵がいっぱい書いてあります。

また、ある時の手紙には

「徹よ、元氣で遊んでいるか。お父様は元氣でお前たち二人の子供のため働いている。どんな苦しみもお前たち子供のためだと思えば苦しくはない。お父様が居なくてもお前たちが何不

自由なく暮らせるのはおじいさん、おばあさんが若い時から一生けんめい働いてくれたおかげだ。だから、おじいさん、おばあさんを大事にしなければならぬぞ。

お前は体が弱いだからしっかりと体をきたえて丈夫になれ。お母様はいろいろとお前の体を心配している。体には充分気をつけるのだ。お母さまに字を習ってお父様に便りをしなさい。お父様はお前達子供がいるので、お前達のために元氣で働かなければならないと思ってお父様をだすのだよ。

隆子はお前には一人しかない兄弟だから仲良く助けあって暮らすのだよ。おじいさん、おばあさん、二人のおばさんの言われることもよく聞きなさい。そして、おじいさん、おばあさんの肩をもんであげなさい。元氣で遊びなさい。さようなら

父より

追伸として母に

徹が分かるようになったら読んで聞かせてやってくれ。二人の子供には不自由をさせないよう、のびのびと育ててくれ。俺は元氣でいるから心配するな、親、兄弟を頼むぞ」

武雄

そして、この手紙の余白や裏にも兄の大好き

な電車、汽車の絵がいっぱい書いてありました。

文章はお世辞にも上手とは言えませんが、三十過ぎの若い父にとっては家族を思う精一杯の気持ちが表示されていると思います。死を覚悟した厳しい戦場にあつても少しの時間を見つけては、自分を育ててくれた両親と一緒に育った兄弟、また、新しく家族となった母や二人の子供、そして母の両親にまで氣遣う父の優しい思いが痛いほど伝わってきます。きっと、父はビルマ各地で過酷な戦いを続けながらも、吉識家の長男としての使命感や責任感を持ち続け、母や兄、家族に対して「俺がいなくなつても、一生けんめい元気に生きるのだぞ」と精一杯の力強いエールを送っていたに違いありません。改めてこの人の子供に生まれて良かったと心の底から思ったのです。

鳴くな小鳩よ

♪啼くな小鳩よ 心の妻よ

なまじ啼かれりや 未練がからむ

たとえ別りようと 互いの胸に

抱いていようよ おもかげを

○母への手紙

農家の嫁として歓迎されなかった母は、父の

いない家で舅姑や二人の小姑に囲まれ、毎日が針のむしろに座っているような生活だったと、よく私に話しました。頼りになる夫はいない、相談できる人もいない、そんな母を父は戦地からいつも氣遣い、慰め、優しく元氣づけていたのです。

母への手紙です。

その後、家族一同元氣か。二人の子供も元気で遊んでいるか、留守中は苦勞も多いと思うが、どうか二人の子供のためにしっかりと働いてくれ。将来はお前が中心にならなければならぬのだから、父によく家のことを尋ねて将来子供たちが路頭に迷わないようにしてやれ。老人の親たちは家のために、子供たちのためによく働いてくれている。その気持ちに対して感謝しなければならぬぞ。いろいろ小言を言うのも、みな、家のため、お前たちのために言うのだから快く受け入れて仲良くしてくれ。お前には苦勞ばかりかけていることはよく分かっている。俺はすべきこともできずに済んでしまったが、現在の俺の気持ちで許してくれ。頼りにする者を失って、お前の気持ちもよく分かるが、二、三年頑張ってくれ。体には十分注意せよ。

武雄

そして、またある時は

「元氣で暮らして居る事と思う。俺も至って元氣で努めている。留守中は責任が重いと思うが、両親の事、家の事、兄弟の事、子供の事は頼むぞ。お前が最後にくれた寸書通りしっかりと努めてくれ。

隆子もぼつぼつ歩くようになっただろう。齒も生えた事だろう。徹も俺のカゲ膳を運んでいると思う。淋しがっていると思うが、よく遊び相手になつてやれ。

父も非常に老体だから、余り田や畑で働かせないようにして精神的に十分なぐさめてやってくれ。年老いた親たちを後に残しているのだから子供たちの事よりも両親の事が氣になる。だから、お前も、時々、実家に帰つて孝行せよ。俺は毎日、のんきな生活をしている。しかし、二人の子供たちのためにしっかりと働いてやる積りだ。しばらくごぶさたするかもしれないが、決して、決して心配しないでしっかりと努めてくれ。色々と留守中は骨折れと思うが頼むぞ。では今日はこれで、さようなら

武雄

父のことを全く知らなかった私ですが、戦地からの父の手紙を改めて読んでみて、激戦の最中にあつても、命果てるぎりぎりまで、残して

きた家族を常に案じては、元気づけていた父の優しく、温かい心情に触れることができたのは私にとって最高の喜びです。母はこの父の便りを一日千秋の思いで待っていたに違いありません。

宵待ち草

♪待てど暮らせど 来ぬひとを

宵待ち草の やるせなき

今宵は月も 出ぬそうなの

〇上き父への母の追憶の言葉

父の手紙の中に、あまり色が変わっていない比較的新しい封書が入っていました。開けてみると、三十数年前に母が亡き父に書いた追憶の言葉でした。おそらく村の遺族会の追悼式で読んだものと思われまます。母はこの封書を父の手紙と一緒に大切にしまっていたのです。

母の追憶の言葉です。

戦後、早、四十一年、肉親や村の人たちの「万歳、万歳」の聲に送られながら汽車の窓から体を乗り出すように手を振り、戦地に向かわれたあの日から早くも四十有余年が経ちました。異国の空に、海に山に、露と消えて終わられた

あなた様を暑さにつけ、寒さにつけ、うれしい時、悲しい時と一日たりとも思わない日はございませんでした。

内地、空襲のはげしくなる中にも、戦地を想像し、戦地からのあなた様の便りが私たちの貧しく寂しい生活の支えであり、家族の唯一の心の慰めと励みでした。戦地からのあなた様の便りは今も私の心の奥深く刻み込まれています。

日本人として立派に責任ある行動の下に散って行かれたあなた様を誇りに思い、私は強く生き抜いてまいりました。一人歩きの出来なかった子供も立派に成人し、社会の中堅人物として活躍してくれています。かつては、この子を含めて一度でいいからあなたの温かい胸に抱きしめてやって欲しいと願ったり、また、成長した姿を夢にでも見せてあげたいと願ったのでございます。

お別れしたころは三十前後の私ではございましたが、あなた様のご加護の下に、今日では孫たちに囲まれながら幸せに暮らしています。どうかご安心ください。そして、安らかにお眠りくださることをお祈りいたします。

静子

夫の戦死という深い悲しみを背負って生きてき

た母は、人生の節々で遺品となった戦地からの父の手紙を何度も何度も出して読み、涙を流しては、慰められ、元気づけられた、その感謝の気持ちを込めてこの追憶の言葉を書いたに違いありません。

この母の封書は父の手紙と一緒に今も箱の中で静かに眠っています。私の大切な宝物です。これからもずっと私を見守ってくれることでしょう。

忘れな草をあなたに

♪わかれても わかれても 心の奥に

いつまでも いつまでも

おぼえておいてほしいから

幸せねがう ことばにそえて

忘れな草を あなたにあなたに

〇過去を忘れるな 振り返れ

父は昭和二十年七月に戦死しました。三十四歳でした。その四年後、体の弱かった九歳の兄も風邪をこじらせて亡くなりました。兄を溺愛していた父が呼びよせたのかもしれない。そして、平成二十四年、九十六歳の母も父と兄のもとに旅立ったのです。今ごろは三人で楽しく過ごしていることでしょう。

私は母が生存中いつもそうしていたように、

朝晩仏壇に手を合わせています。軍服姿の父の
遺影を見ながら「この人の人生は一体何だった
のか：」「父は幸せだったのだろうか：」と、

我が子の成長を一度も見ることなく若くして戦
場に散った父が哀れに思えてなりません。父を
奪った戦争を心から憎みます。

時間が経てば、悲しみは消え、苦しみも薄れ
ます。しかし、記憶を鮮明に持ち続けることが、
戦争の残虐さを風化させないことだと思えます。
「過去を忘れるな、振り返れ」私の好きな言葉
です。

これからも、父亡き後、母と歩んだ戦後の苦難
の道を振り返りながら、限りある私の人生、ゆ
っくりと歩いていきたいと思えます。

浜辺の歌

♪あした浜辺を さまよえば

昔のことぞ しのばるる

風の音よ 雲のさまよ

寄する波よ 風の音よ

父と母は数十年前に書いた自分たちの手紙が
まさか皆さんの前で披露されるとは夢にも思わ
なかったでしょう。二人とも今頃きつと驚いて
いるに違いありません。

全国戦歿者慰霊大祭余話

奉納された千羽鶴に添えられた手紙 (抜粋)

英霊にこたえる会主催の全国戦歿者慰霊大祭
は、昨年で第 42 回を迎えたが、昭和六十年の
第 10 回慰霊大祭から、千葉県茂原市にあるマ
リアの里カトリック日曜学校は、生徒さんの作
った千羽鶴を奉納している。その心の籠った千
羽鶴は拜殿に飾られ、添えられた手紙は朗読披
露され、その文面はいつも参列者の心に響くも
のがある。

奉納が始まってから 15 年目となる平成十一
年の慰霊大祭での手紙の内容は、本会がモット
ーとしている「日の丸は国旗、君が代は国歌、
靖國神社は国民の心」と共感するものがあり、
この際、改めてその要点を抜粋して掲載する。
(まず全日空機ハイジャック事件のことを述
べたのち) かつて操縦桿をにぎり、たった一人
で日本国民一億の命を背負って、敵艦に突っ込
んで行った若き少年達！一体この格差は何だろ
うと考えていたとき、いみじくも同じチャンネ
ルで、日教組の日の丸反対、君が代反対のニュ
ースが報じられていました。

(中略)

更に、あるキリスト教団体の、日の丸、君が
代反対の様子が報じられていました。キリスト
教徒である前に、人間であり、神の摂理によつ
て日本の国に生まれたのです。国民として当然
のことではないではないでしょうか。

靖國に眠る英霊は、日章旗を体に巻き、日本
人として誇りを持って、家族を想い、恋人を想
い、国のために己が生命を捧げて逝かれたので
す。

終戦記念日を迎えるにあたり、反対反対と叫
ぶ前に、せめてこの日くらいは、国民ひとりひ
とりが英霊に感謝の気持をもって、日の丸を仰
ぎたいものです。

法律によって強制されるのではなく、かつて
のように人を愛し、国を愛する心を持った日本
人になったとき、英霊よ安らかにと祈ることが
できるのではないのでしょうか。

平成十一年八月十五日

マリアの里カトリック日曜学校

代表 塩崎 深雪

※現在の代表は塩崎世津美氏である。